

高校生の原風景に関する地理学的一考察 —模擬授業での取り組みから—

三木 一彦*

A Geographical Examination of High School Students' Indelible Childhood Visual Memories: Drawing from Demonstration Lessons

Kazuhiko MIKI

要旨 本稿は、筆者が高校での模擬授業時に生徒たちに記入してもらった「自分にとっての原風景」を主題別に提示した上で、その背景や意味について、主に空間的な側面から考察を試みたものである。検討にあたり、高校生の原風景を、①家、②環境、③学校、④非日常・非風景、の大きく4つに分類した。自分が育った家や家族・親戚、あるいは自然環境を記述する回答は多く、それらが原風景の核としての役割を果たしていると推察される。一方で社会環境や学校などをえがく回答もあり、とりわけ学校を取り上げた回答に関しては、教育系の模擬授業受講者という回答者の志向も考慮する必要があるだろう。今日、高校においては、より早い段階から進路を意識させる指導を行なう傾向が強いが、現在の高校生活を充実させたり、過去の自分の原風景と対話したりするような方向性をもっと重視されてよいと考える。

キーワード：原風景 高校生 地理学 空間 模擬授業

I. はじめに

(1) 問題の所在と目的

人間は誕生以来、さまざまな体験を通じて自らを成長させていく。そうした数々の体験のうち、「人の思想形成に大きな影響を及ぼす幼少時の体験」を「原体験」とよぶことができる。そして、「心象風景のなかで、原体験を想起させるイメージ」が「原風景」である¹⁾。

いくつかの自伝的作品を著したドイツのハンス＝カロッサは、その幼少期に題をとった『幼年時代』²⁾ 執筆の背景を、「『幼年時代』の成立について」という小文に記している。それによると、「子供は自分の存在のあらゆる瞬間を全的に生き

て」おり、「あの最初の時代の行為や苦しみのうち以外のどこにいったい、彼の存在の根源の姿が描きこまれているのでしょうか」との問いかけが発せられる³⁾。続けて、大人はその過去に照らして自己を省み、「そしてもしかすると、それが指し示すところにしたがって自己を新たにうち建てるのが可能でないかどうかを究めたい」と望むとしている⁴⁾。多くの作家がそれぞれの原風景を作品化してきたのも⁵⁾、それによって自己の立ち位置を見定めたいとする意思に起因するものといえよう。

原風景の創出という意味で、現代日本は決して恵まれた状況にあるとはいえない。建築家の安藤忠雄は、第二次大戦後の経済一本槍の社会が子供から空き地と放課後を奪い、「今の子供たちの

* みき かずひこ 文教大学教育学部学校教育課程社会専修

最大の不幸は、日常に自分たちの意思で何かができる、余白の時間と場所を持たないことだ」と指摘している⁶⁾。臨床心理学者の河合隼雄の言を借りれば、「だいたい子どもというものは、「親の目が届かないところ」で育っていく」⁷⁾はすが、諸方面での管理社会化の進展により、子供の遊びに必要な時間・空間・仲間のいわゆる「三間」のあり方もきわめて窮屈なものとなってきた⁸⁾。

東京都千代田区が2013年に施行した「千代田区子どもの遊び場に関する基本条例」は、これら「三間」が失われている現状をふまえた上で、「区を構成する全ての人々が連携・協力し、将来を担う子どもたちが、外遊びを通して健やかにたくましく育つことのできる社会を築くため」に制定された⁹⁾。こうした条例を行政が制定すること自体、とりわけ都市部の子供がおかれた現状の一断面を端的に示すものといえよう。

筆者の専門とする地理学の立場からすると、「三間」の中の空間的な側面、具体的にいえば高度成長期以降の都市化が与えた子供への負の影響（象徴的には「空き地」の喪失）が注目される¹⁰⁾。『文学における原風景』を著した奥野健男は、ことに日本の都市をえがいた現代小説において、場所感覚の欠落が目立ち、それが都市の変貌の激しさ、換言すれば原風景の稀薄さに由来することを論じている。とはいえ、彼はその著書の末尾で、たとえそのような状況下であっても、「文学者は、—さらに人間は必然的にそれぞれの“原風景”を持っている。それは殆んど自己形成空間、環境による先天的なものである」とし、そうした原風景を現実・自己の中に活かせるかどうか、その人の文学・芸術の成立の可否や作品の価値を決すると述べている¹¹⁾。どのような人間も必ず個々に原風景を有するとの指摘は、文学者や芸術家ではない一般の人々にも、十分にあてはまるものと思われる。

再び奥野によれば、原風景は幼少年期と思春期とに形成され、前者は誕生から7・8歳頃までの環境によって「無意識のうちに形成され、深層意

識の中に固着する」ものである¹²⁾。本稿では、主にこの幼少年期の原風景に焦点をあて、上のような環境の中で育つ現代日本の高校生たちの原風景について¹³⁾、筆者が高校での模擬授業で得た回答を主題別に配列・提示していく。その上で、それぞれの原風景の内容や、それが有する意味について、若干の考察を試みたい。

(2) 研究手法

本稿で用いるのは、筆者が2011～16年度に模擬授業で訪れた高校のうち、高校生が「自分にとっての原風景」を記入した用紙を回収できた19校、計576名分の回答である。その一覧を表1に示したが、その範囲は福島・栃木・埼玉・千葉・東京・神奈川・静岡の7都県に及び、とくに東京圏のベッドタウンに所在する高校が多い(図1)。模擬授業参加者は高校2年生が中心で、一部1年生を含む場合がある。方法としては、模擬授業出席者に対し、「あらかじめ自分にとっての「原風

表1 「原風景」回収高校一覧

番号	年度	都県名	人数
①	2011	千葉・県	28
②	2013	千葉・私	16
③	2013	東京・私	25
④	2014	埼玉・県	56
⑤	2014	埼玉・県	21
⑥	2015	栃木・県	85
⑦	2015	静岡・県	43
⑧	2015	千葉・県	25
⑨	2015	埼玉・市	36
⑩	2015	福島・私	38
⑪	2016	東京・都	46
⑫	2016	埼玉・私	30
⑬	2016	埼玉・市	8
⑭	2016	千葉・県	6
⑮	2016	千葉・県	34
⑯	2016	千葉・市	29
⑰	2016	埼玉・県	14
⑱	2016	神奈川・県	15
⑲	2016	東京・私	21

注) 都県名の後は高校の設置者。番号は図1と一致する。
(筆者作成)



図1 「原風景」回収高校所在地

注) 番号は表1と一致する。(『詳解現代地図』(二宮書店)を基図として筆者作成)

景」を紙に書いておいてください(2~3行程度で結構です)」との課題を提示した。多くの場合、原風景とは何かをこちらで定義して示すことはしなかった¹⁴⁾ ため、多様な回答が寄せられたが、そうした点をふまえつつ、さまざまな形の原風景をとらえていきたい。また、回答が文章であ

り、定量的な分析には適さないため、以下では、それぞれの箇所で行論に関わる回答の全文を原文のまま表に示し(ただし、表記・誤字等は適宜改めた)、それを引用する形で記述を進めていく。なお資料的な意味合いもあるため、表中にはできるだけ多くの事例を記載するようにしていく¹⁵⁾。

次章以降における記述の順序は、おおむね生まれてから成長する段階に沿っていく。すなわち、Ⅱ章では家族や親戚、Ⅲ章では幼少時の環境、Ⅳ章では保育園および幼稚園以降の学校、Ⅴ章では非日常的な場面や可視的でない原風景を扱う。そしてⅥ章で原風景と進路選択の関わりを述べることで、まとめにかえたい。

Ⅱ. 家

(1) 家族と自宅

多くの人間にとって、幼少期をともに過ごす家族や、その家族と暮らす自宅は、原風景形成の上で大きな意味を有する。それは、さまざまな文学作品などが作者自身の家族を取り上げていることから例証されよう¹⁶⁾。

まず、家族についての記述を表2にまとめた。2-1（表2の1.の意、以下同様に表記）のよ

うな例はにわかに信じがたいが、おそらくはその場面の家族写真を何度も見たことで、「自分がうまれた後」が原風景として刷り込まれたものと考えられる。また親との関係のうち、2-2は父親が亡くなっているという現状が、「楽しかったことだけははっきりと覚えています」という記憶の定着につながっていると思われる。2-3も、幼少期の家族との温かいふれあいが今との比較の中で語られている。2-4の「ふみきり」は、何の変哲もない風景が親の存在によって変わる例といえよう。

家庭での教育に関しては、2-5がたった一文ながら印象的である。日常的な親子関係が良好だからこそ、「親を怒らせた時の顔」が強く心に残るのであろう。幼少期の読み聞かせが本好きにつながった2-6、形は違えど親の料理姿が原風景となった2-7・8、親子での落ち葉掃きをえがいた2-9などは、狭義の「教育」に収まらない場面が子供の成長の滋養となっている例である。

表2 「原風景」の中の家族

1.	自分がうまれた後、病院の前で写真をとったこと。小学校時代の習い事の大会の風景。(④♀)
2.	4歳くらいの頃、父親とどこかで車で出かけた時の記憶。今は亡き父親に、自分が当時体験したことを私はひたすら話し、それを父親はひたすら聞いてくれました。楽しかったことだけははっきりと覚えています。(⑩♀)
3.	私が3才まで住んでいたボロボロのアパートでは、毎朝、母と2人で父の名前を大声で呼んで起こしていました。よく、母と姉と公園に遊びに行ったりもしていました。今では両親の仲は変わらずにいますが、家族でどこかにでかけたりしていません。たまには昔のように家族ででかけたいです。(⑩♀)
4.	父と母と見に行ったふみきり。(⑩♂)
5.	親を怒らせた時の顔が忘れられない。(⑤)
6.	小さいころよく親に絵本や物語を読んでもらって、楽しい話や悲しい話などいろいろなものがあることを知り、本に興味をわいたので、今でも本を読むことが好きです。(⑨♀)
7.	昔住んでいた東京のマンションで、その日は珍しくお父さんがお昼ごはんをつくってくれた。メニューは焼きそばだった。このレアなお昼に、窓からみた空に虹がかかっている、私ははしゃいでいたのを覚えている。(⑩♀)
8.	自分にとっての原風景は、母が台所で料理をしている姿。小学生の頃、料理に興味を持っていて、ずっと母が料理しているのを横でじっと見ていた。ときにお手伝いもしていた。今となっては、自分で料理を出来るようになった。(⑩♀)
9.	私にとっての原風景は、秋に汗をかきながら父・姉と家の前の落ち葉はきをしたことです。家の前には大きなイチョウ並木がありますが、私の家の前のイチョウは周りの家よりも細く若々しい木です。ですが、幼い私から見ると大きく、力強く、はいてもはいても終わらない落ち葉を不思議に思ったほどでした。私は途中であきてしまい姉と遊んでしまいましたが、三つの大きなふくろに入った葉を三人でゴミ捨てに行ったときは、強い達成感を感じました。(⑥♀)
10.	小学生の頃に風邪を引いた時、親に薬を飲めといわれたのに、飲まなくて、熱が40℃近くまで行って2週間ぐらい学校を休んだことがある。それ以来、風邪を引いたらすぐに薬を飲むようにしている。(⑨♀)
11.	小学校2年生のときに車にひかれて、救急車で病院まで運ばれる際、父親が自分のことを励ましてくれたこと。(⑦)
12.	年中くらいの時に病院に入院して、夕方くらいに母親が来て、自分のねていたベッドの横にあるイスにすわって、自分と楽しくはなしている風景。(⑩♂)
13.	私にとっての原風景は、中学3年の高校受験がせまっている時の塾から家に帰るまでの車の中で母が私が車の中に入るといつも同じ音楽を再生してくれる時です。受験のあせり、あせりからくるイライラ、毎日夜おそくまで塾に通ってつかれてる私を、いつも母は、同じ音楽をかけて、それも元気の出る音楽を流してくれました。そのささいな母の優しさに勇気づけられました。(⑩♀)
14.	小さい頃にお兄ちゃんたちがやっていたバスケットを見て、「すごい、おもしろそう」と感じたのをきっかけに、今、バスケット部に入り、バスケットを続けている。(④)

注)文末()内の番号は表1・図1に対応。性別については判明分のみ記載(以下同様)。
(高校生の回答より抜粋。以下同様)

表3 「原風景」の中の自宅

1.	僕は小さい頃から自分の家が好きで、よく家でゴロゴロしていました。そして夕方になると家の窓からはオレンジ色の夕日が見えて、それを思い出すと今でも小さい頃を思い出します。また、そのようなゴロゴロと夕日を見ていたようなことから、少しマイペースな現在の自分があると思いました。(④♂)
2.	引っ越し前のアパート内。ここで4歳ぐらいまで生活していた。弟がこのアパートで生まれ、ソファの上で一緒に写真を撮ったのを覚えている。そのときはシンケンジャーのおもちゃで遊んでいました。(⑥♀)
3.	私にとっての原風景は、兄と遊んでいる風景です。二人でおし入れに入って戦隊ヒーローになりきって変身したり、技名を大きな声で言ったりしたことが記憶に残っています。そしてふざけていると、思いきり頭をぶつけ、号泣しました。(⑫♀)
4.	縁側とビニールのプール。小さい頃、真夏日に妹とビニールのプールに入ってきゃっきゃしながら水鉄砲で遊んで、縁側からお母さんに何かを言われてもとても楽しくて、片づける時にまた遊びたいと思い見ていた縁側にあるビニールのプール。(⑥♀)
5.	私にとっての原風景は、小さい頃住んでいたマンションの駐車場です。同じマンションに住んでいた友達とかくれんぼやおにごっこしたことをよく覚えています。今でもマンションの下で遊んでいる小さい子とかをみると、その時のことを思い出します。(⑫♀)
6.	前に住んでいた家。前に住んでいた家は昔のお家で古かったから、その家をこわして新しくした家に今は住んでいる。5歳ぐらいに完成。12年目くらい？。私が住んでいた期間は短くて、まだ小さいのでくわしくは覚えていないけれど、でも、昔の家は玄関が広いし、部屋も広く、冬になるとストーブ(石油でない)上でぎんなんをやいたり、おふろは囲いは広いわりにおふろが小さく深めだったり…。(⑩)
7.	自分にとっての原風景とは、自分の実家や家族・地元のことです。私は、寮生活をしていて、あまり実家などに帰ることができません。家族にも時々しかあうことができません。それがつらくなる時があります。その時に、実家のことを思い出すと、落ち着くことができます。実家の自然、近くの川、自然やふるさとの自然、川の流れる音、などイメージできる。(⑩)
8.	私にとっての原風景とは、今の土地に移り住む前のことである。幼いころは鹿児島に住んでいた。その土地で学んだのは地域交流、食文化、友だち付き合いなどの様々なことだ。東京に初めて来たときは、山も海もなく、何年も慣れるのに時間がかかったことを覚えている。今では、旅行で他県に行き、山と海を見ると、不思議と心から何かか込み上げてくるのが分かる。今、改めて昔のことを思い出すと、些細な出来事も昔の私にとってはとても大きなものであった。それは子どもならではの世界であったと、大変貴重なものとして、心にとどめている。その記憶があるからこそ、自分を再認識することも大切である。また、人生に影響を及ぼしていると言っても過言ではない。その素晴らしい思い出を忘れないようにするためにも、たまに振り返ることが重要になる。(⑪♂)

他方、親へのちょっとした反抗で痛い目にあった2-10や、緊急時に親が頼りになった2-11・12のような回想もある。2-13のような高校受験期の親の姿も、幼少期とは別な形での頼もしさを伝えている。2-14は兄弟の例で、次子以降の場合、親だけではなく、兄や姉を見ながら育っていく部分が少なからずあることを示している。

表3は自宅に関わる記述である。3-1~3は自宅の屋内のもので、とくに「よく家でゴロゴロしていました」という3-1からは、子供が余裕ある時間をもつことの意味がうかがえる。3-3~5は自宅とその周囲で、一緒に遊んでいた兄弟・姉妹や友達との関係と結びついて記憶されている。現在はそこに住んでいないことが逆に原風景としての定着につながっていると解釈できるのが3-6~8で、それぞれ建て替え前の家、寮生活の実家、引っ越し前の家を回答している。3-8では「その素晴らしい思い出を忘れないようにするためにも、たまに振り返ることが重要にな

る」と、意識的にその原風景を思い出そう努める姿勢が見受けられる。

(2) 祖父母・親戚

高校生からの回答の中で、家族・自宅とならんでしばしばえがかれるのが祖父母を含む親戚の姿である(表4)。それは4-1のような祖父母が働く姿であることもあるが、むしろ4-2~4のような親戚が集まる場面が子供心に楽しいものとして残る場合が多いようである。中には、「昔のさわがしい感じがなつかしいです」(4-3)と、現状との比較で語られる場合もある。

高校生たちの自宅に比べると祖父母の家が「田舎」にあることが多いせいか、祖父母宅がそれを取りまく自然環境とともにえがかれることも多い¹⁷⁾。4-5では「都会育ちの私」が「自然の美しい風景にひかれ、夢中になっていた」し、4-6でも曾祖母宅の風景が「また行きたいな、戻りたいなと思える場所」となっている。また、祖父

表4 「原風景」の中の祖父母・親戚

1.	祖父が大工であったため、家の前に工場があり、そこで年の離れた兄達と遊んでいた風景。(14♀)
2.	小さい頃によく行っていたコスモスが咲いていて、細い川が流れている所。家族と行ったり、いともこと行って走りまわって遊んだことがとても記憶に残っています。リフォームする前の家。昔は台所でおばあちゃんがよくドーナツを作ってくれました。広い畳の部屋は親戚みんな集まってたくさん話をしたー!!(^_^)(6♀)
3.	自分が生まれた実家の大広間で親戚や近所の人達をたくさん呼んで宴会をしている風景。今も正月などは宴会を開くが、昔のように何十人もの人がいっぺんに家に来てどんちゃん騒ぎをすることはなくなったので、昔のさわがしい感じがなつかしいです。(19♂)
4.	新潟にあるおじいちゃんの実家で、みんなでこたつに入ってみかんを食べている風景。私がまちがえておじいちゃんのお兄さんのことをずっと「おじいちゃん」と呼んでいて、みんなが笑っていた。本当のおじいちゃんは笑いながらも少し寂しそうだった。色で表すとオレンジ色の風景で、家族団らんのあたたかいわいわいとした雰囲気。(3)
5.	祖父母が住んでいる田舎の家へ行くたびに朝早くから日が暮れるまで兄と駆けまわっていた。都会育ちの私にとっては、夏の夜に見た蛍の光、冬の朝に雪がキラキラと光っていること、そんな自然の美しい風景にひかれ、夢中になっていた。(6♀)
6.	曾祖母の家がある長野県のある自然豊かな風景を思い浮かべます。森、山、川などが四方八方にありました。また行きたいな、戻りたいなと思える場所です。(16♀)
7.	私にとっての原風景は、子供のころ祖父母の家の屋上から見た景色です。私は、夏休みに祖父母の家に行くことが多く、よく屋上にのぼりました。そこからは木々が生い茂っていて、遠くには田んぼが広がっているのが見えます。空は青々としていて、入道雲が湧き上がっていたのを覚えています。夏になり、蝉が鳴き始めるころになると、その景色を思い出します。それはとても懐かし、私にとって大切な思い出の一つです。(6♀)
8.	私にとっての原風景は、おばあちゃんと一緒にどんぐりを拾った時の風景です。おばあちゃんの家近くにどんぐりの木があり、秋になると下にたくさん落ちていました。それを2人でたくさん集めていた思い出があります。(15♀)
9.	私の「原風景」は、夏に祖父の家に遊びに行ったときに、祖父と2人で遊びに行った林です。その林は祖父の家から近く、田んぼ道をしばらく歩いて行って、昆虫採集をしたり、近くの小川でザリガニ取りをして遊んだのを覚えています。今、その林は住居地の一部として無くなってしまいましたが、そこは、私と祖父の思い出の一つです。(6♂)
10.	自分にとって祖母の家の周りの景色が原風景です。祖母の家は山の山頂近くにあり、山を下っていくと今は家が多く佇んでいますが、幼い頃はまだ森があり春夏秋冬の良さを感じられました。その良さを写真として後世に残せるようにしたいと今は考えています。(15♀)
11.	私にとっての原風景は母の方の祖父・祖母の家です。色々と事情があり、小学6年生の時以来行ってないのですが、今でも覚えています。家の前には山があり、隣には畑があって、時々手伝いをしてました。冬は雪がたくさん積もって一面に銀の世界が広がっていました。よく、いともこと兄とで雪合戦をしたのを覚えています。夏は山に行って虫とりに行きました。家の外には大きな蔵もありました。よく蔵の中を探検しました。かび臭くて、ほこりっぽかったけど、私にとっては見たことのないものがたくさん置いてあったので、とても興奮したのを覚えています。外は澄んだ空気と共に土の臭い、草の臭い、虫の鳴き声、などがあって、何時間も外にいたのを覚えています。祖父・祖母の家や周りはいつも輝いてみえました。最後に1回だけでいいのでまた行きたいです。(10)
12.	自分にとっての原風景とは宮崎県での出来事だ。1～2才まで宮崎に住んでおり、年に1ヶ月程高校に入るまでは帰省していた。知り合いも親戚も多いし、自然が豊かである。あと数年したら移住しようと思っている。風景も人間全てが自分の原風景である。(11♀)
13.	小学4年生の時におばあちゃんが亡くなってしまったこと。初めて身内の人が亡くなって病院に行ったり、葬式に行ったりして人の亡くなった姿を見たこと。(7♂)
14.	今までで一番印象に残った出来事は、ひいおじいちゃんの死です。なかなか会う機会が少ない中、いろいろな思い出をつくることができたひいおじいちゃんとの時間は言葉ではとても表しきれない大切な宝物です。(7♀)

母宅の光景が季節とともによみがえったり(4-7)、祖父母との遊びを振り返ったり(4-8・9)する例もみられる。

しかし、4-9・10のように、そのようないわば「理想郷」的な風景も時間の経過とともに変化していく。その中で、祖母宅の周辺に卡ろうじて残る自然の良さを写真として残そうという4-10は、自身の手で「理想郷」を保持しようとするささやかな抵抗の試みととらえられよう。事情によって行けなくなった祖父母宅について詳細にえがき、「最後に1回だけでいいのでまた行きたいです」とする4-11は、切なさすら感じさせる。4-12は親戚の多い出身地を原風景として懐

かしみ、そのことが「あと数年したら移住しようと思っている」と将来設計にまで影響を与えている。

平均寿命が延び、死を身近に感じる事が少ない現代日本において、祖父母や曾祖父母の死は、それを比較的近で体験できる機会であるため、子供に強い印象を与える¹⁸⁾。4-13・14はそうした例であり、人が死ぬことによって、その人と過ごした時間が「言葉ではとても表しきれない大切な宝物」(4-14)へと昇華されている。これもまた、不在による原風景への定着の一種と考えられる。

Ⅲ. 環境

(1) 自然環境

前節でもふれたごとく、自然環境は子供の心身を育む上で大きな要素となり得る¹⁹⁾。ここでは自宅の周囲にある自然についての記述を表5にまとめた。

当然のことながら、本表に関わる回答内容は、高校の所在地によって大きく左右される。5-1～6は同じ高校の生徒による文章であり(年度は同一ではない)、当該高校が自然環境に恵まれた地域に所在していることを物語っている。中には、「今では残り少なくなってきたこの自然こそが、今の自分を作っていると思う」(5-3)、「現在日本はすごく発展して緑が少ないので、そういう風景を残したい」(5-6)など、自然

環境による自身への影響や、自然が失われつつある現況を自覚的に認識している例もある。

上記以外では、川(5-7・8)・森林(5-9)といった自然景観が取り上げられている。「自然はどれも遊具だった」、「私はとてもぜいたくな遊び人だったのだろう」(5-7)との述懐からは、都市的環境の中にあっても子供が自然とふれ合う大切さが読み取れ、5-8のようにそこでゆったりとした時間を過ごすこともまた貴重である。そうした自然は必ずしも大きなものであるとは限らず、原っぱ(5-10)や空き地(5-11)、さらには一匹のホタル(5-12)をあげる生徒もいる。

ホタルの減少から生態系の変化を感知する5-12・13、よく遊んでいた森の一部が開発された5

表5 「原風景」の中の自然

1.	家の周りは田と畑、近所の家までは約20m程離れている。家の前には竹林、住んでいる地区が少し盆地気味なので、ぐるっと一周が山か林。虫や動物はたくさんいるし、川もあるので釣りにも行ける。しかし、店が近くに無い。道を通る車も最低限程度なので、道路の真ん中で遊んでいても車が通らない。山のせいで夕暮れは早め、特に冬はつるべ落とし。しかし、夜見れる星は格別だ。街灯もろくに無いため、流れ星もたまに見れる。冬場の夜空は特に見やすく、きれいな夜空。まさに田舎、と言える風景。(①♂)
2.	家の周りは田んぼばかりで、他には何もなかった。そんな田んぼばかりの何も無い道を、よく友達と自転車で走りまわっていた。よく遊びに行ったのは公園や野原で、公園では遊具で遊んだり、かくれんぼなどをやった。野原はとても広かったので、鬼ごっこをしたり、落ちていた木片などでチャンバラごっこをよくやった。たまにはちょっとした小山や竹林に行き、秘密基地を造った。遊びつかれたり、腹が減ったら駄菓子屋にも行った。お金が無いときは、おじさんが1つだけたどでくれて嬉しかったのを覚えている。(①♂)
3.	自分の住んでいるO町I(集落名)。都会とは違い、田舎ならではの自然豊かな所。海や山は、季節に合わせて違った顔を見せてくれる。時折、冬の家や山の寒さが厳しさを増す。今では残り少なくなってきたこの自然こそが、今の自分を作っていると思う。(①♂)
4.	私は小さい頃、よく山や家の近くの小川で遊んでいました。そこには、季節によって違った草花が咲いており、私は、その草花を見たり、生き物を探したりするのが大好きでした。このような季節によって変わる自然の風景が私にとって原風景です。(①♀)
5.	生まれたときからずっとそばにある海が自分のもととなっているものだと思います。毎日当たり前のように見ている海がとても大切なものです。(⑧♂)
6.	学校の窓から見られる田園、森林、山、田舎の風景。現在日本はすごく発展して緑が少ないので、そういう風景を残したい。(⑧)
7.	友と遊んだあの公園、一緒に釣りをした川。私にとっては、自然はどれも遊具だったかもしれない。それを思うと私はとてもぜいたくな遊び人だったのだろう。(⑫♂)
8.	A川の土手で輝く夕日の中、しばふの上に愛犬とともに川と夕日を静かにながながと見たときの風景です。(⑫♀)
9.	小さい頃、よく友達と秘密基地を作ったこと。よく森林など、木の多く生えていた所に作っていた。(⑬♀)
10.	自分にとっての原風景は、以前住んでいた場所にあった大きな原っぱです。幼少時代に毎日のように通って母親と遊んでいたときの記憶が何年たっても忘れられない思い出になっています。(⑬♂)
11.	家のすぐ目の前にあった空き地。ザクロの木があり、駅が隣にある。奥には背の高い草が生えていて、さらに奥に進むと穴がある。(⑥♀)
12.	私にとって原風景とは、幼少の頃の夏の夜に家の駐車場で一匹のホタルを見たことである。今は環境の変化により、自然の生態に変化がおきているため、ホタルを目にする機会が減ってきている。(⑩♂)
13.	私は蛍がいる風景を原風景と考えました。昔は水辺にどこでもいましたが、今は水質汚染、減反政策により水田が減っていることなどが原因となり、蛍が身近で見ることができなくなりました。蛍を見るには人が未開拓の地へ行かなければ、見られないと思います。(⑥♀)
14.	私の思い出の原風景は、家の前にある森です。私は小学生の頃の六年間、よくその森で秘密基地を作ったり、森を探検したりしていました。時には兄と、時には友達と、毎日森に行っていました。しかし最近、住宅の拡大が進み、森の一部が壊されて売地となってしまいました。今では昔と比べると木も減ってしまいましたが、今でもその森を通ると当時の思い出がよみがえってくる風景です。(⑮♂)

－14のように、幼少期に自然に親しんだ経験が年齢的に近い世代の方が、大人よりも地元の環境変化に敏感な可能性がある。そういう意味では、自然環境に関わる部分において、子供は大人と異なる地域変化の見方を秘めているといえるだろう²⁰⁾。

(2) 社会環境

人間がつくる社会環境のうち、主として子供の遊び場として設計されるのが公園である。しかしながら、今回の回答における公園の記述は、やや平板なものが多い印象をもった²¹⁾。その中で特徴的なものを表6に示した。

6－1は公園自体というよりも、そこから見た富士山の風景があげられている。公園での「いつも」の遊びをあげたのが6－2・3で、公園での遊びに高校生の自分の原形を見出しているのが6－3～5である。ことに6－3は、以前と比べて少なくなったといわれる異年齢集団の中での役割分担が教員志望につながったとしている。また、6－5・6のように時間を忘れて遊びに没頭できるのも、子供の特権であろう。6－7では、夕方の公園に来ていた「あげパン屋さん」が聴覚や味

覚と合わせて記述されている²²⁾。6－8は中国出身者によるもので、公園とその周囲の情景が友人なども含めて回想されている。

表7は、より広い意味で子供をとりまく地域や社会をえがいた回答である。7－1は東京出身者の回答で、ビルや道路を原風景とするかたわら、ビルの間から見えた「とても明るいきれいな月」は、あたかも自然の象徴であるかのごとく読み取れる。7－2は6－8と同じく中国出身者による記述で、「人がいっぱいいてにぎやかですごくたのしかったです」と振り返っている²³⁾。前節の自然環境と同様に、地域社会のあり方も学校の所在地によって規定される部分があり、7－3・4は5－1～6で取り上げた回答と同じ高校の事例である。中国の例も含め、相対的に濃密な関わり合いが存在する地域社会のありようを示すものといえる。

地域の風景について、「昔ながらの風景が残ってほしいです」(7－5)、「昔と変わって色々なものが作られていますが、全然気になりません」(7－6)という二つの記述は、両極端であるようにみえて、幼少期を懐かしむ点においては共通

表6 「原風景」の中の公園

1.	近所にある公園には高台があって、小学生のころはよくそこに登っていた。晴れた日に見えた富士山は、最初に見えた小四のときの自分にはあまりに綺麗で、あまりにも印象的な風景であった。今でも、晴れた日に近くを通りかかると、ついそこに登ってしまうことがある。小さいときに見たあの風景は、今も変わらないまだ。(18才)
2.	幼稚園の後、毎日友達と走って行った幼稚園の隣の公園。私たちの遊びはいつも家族ごっこだった。あの頃は毎日一緒にいるのが当たり前だった。この公園はいつもみんなのことを思い出させる。みんなは今、何をしているのだろう。(15才)
3.	小学校2年生の時、近所の公園で近くに住む子供たち8人ぐらいでいつも遊んでいた(私が1番年上、下は3歳まで)。鬼ごっこやケイドロ、ドッジボールがほとんどで、小さい子がたくさんいたので、私は必然的に世話をしていた。かくれ方や走り方、ボールの投げ方等、教えながら一緒に楽しんでいた。→「教える」ということが好きになった。(6才)
4.	ブランコにのって、いつもと違う目線で周りを見渡すことが好きだった。今、私は物事をいろいろな意味でとらえることが多い。(4才)
5.	公園で遊んでいる場面。母親を何時間もまたせた。その間、自分は1人で公園をかけまわり、すべり台、ブランコ、すな場遊びなど、思いっきり楽しんでいた。自由ほんばうな性格は、ここからきていると思う。夜寝る前、親が本を読み聞かせてくれたのを覚えている。自分はその物語に夢中になって入りこんでいた。本好きはここからきている。本を読むことが習慣となっている。(4才)
6.	砂場で遊んでるときに、「何分までね」と言われてその時間に帰ったのに、外の時計と中で時間が違って、すごく怒られたのが記憶に残ってる。早く行動しようと思った。(4才)
7.	私にとっての原風景は、幼稚園時代にあそんでいた公園によくきていたあげパン屋さん。幼稚園が終わってすぐに公園で夕方まであそんで、あげパンさんが近づくと共に独特な音楽が流れ、みんなで仲良くおいしいあげパンを食べて楽しかった。(16才)
8.	私の原風景は中国に住んでいた頃です。私が住んでいた所は、30階建てのマンションが何棟もある団地で、住んでいた部屋からは、公園や、広場がありました。その公園には、ランニングマシーンなどの運動器具があり、それでよく遊んだのを覚えています。日本でそのようなものを見ると、中国での友達のことや、楽しかったことを思い出します。(6才)

表7 「原風景」の中の地域・社会

1.	自分にとっての原風景は、東京のビルや交通量の多い大道路の様子です。なぜなら、幼少期のほとんどを東京で過ごし、その風景が心に残っているからです。また、ビルの間から見えた、とても明るいきれいな月を見たことも記憶に残っています。(⑨♂)
2.	私の原風景は、小さい頃中国ですんでいた家の近くにあるめっちゃくちゃでかい川がある所です。そこはとても広く川がでかく、いろんな物があります。でっかい岩か木、アスレチックもあります。そして船もあり、戦争でつかわれたのかわからないけど戦車もあります。大きな橋の下ではバスケのゴールがあって、夜には若ものがあつまってバスケをしていました。夜には若もの以外にも前の通りの所ではおばあちゃんかおじいちゃんがあつまり、ダンスをしたりお酒をのんでわいわいしたり、やたいがほぼ毎日ですごくにぎやかでした。銅像もあり、とてもたのしい所でした。そして季節によって行事があったりして、冬には氷のブロックでつくった巨大すべり台が作られていて、すごかったのしかったです。冬になると-30℃こしてしまうのですごく寒いので。人がいっぱいいてにぎやかですごくたのしかったです。(⑩♂)
3.	緑に囲まれていて自然がたくさんある、地域の人たちが助け合っており、密接に関わり合っている、自然と関わり合って農業をしているという風景。(①♀)
4.	O(町名)唯一のショッピングセンター。親の仕事のつごうで小さい頃から通い育って来た所で、仲良い大人の方がたくさんいて、楽しい思い出のつまった場所だから。(⑧♀)
5.	自分のすんでいる地域の田畑の風景。私が小さかったころにくらべて、新しい家や店が多くなってきているので、昔ながらの風景が残ってほしいです。(⑩♀)
6.	昔、住んでいた家の近くの坂道から見える田んぼの風景。たまに田んぼ畑が広がっている所があると、思わず昔を思い出して、見とれてしまいます。昔と変わって色々なものが作られていますが、全然気になりません。昔見た風景が頭の中に記憶されているので、自動的にあの風景に切り替わります。私にとってあの風景は最高なものです。(⑩♂)
7.	家の近くに小さな駄菓子屋さんがあって、小学校低学年のころは、放課後や休日に友達と買いに行っていました。しかし、今はシャッターが閉まってしまって、物寂しい感じがします。ふと、駄菓子屋のおばちゃんは元気にしてるかな?、と気になります。(⑥♀)
8.	2011.3.11の東日本大震災での影響で福島第一原発事故が起こり、多くの福島県民や、その家族、親戚の方が苦しんでいた姿。幼い頃、福島県に住んでいた時の、緑豊かで空気も澄みわたり、自然にあふれていた光景。牧場では“自然のありがたさ”を再認識し、N湖のほとりでは、“日本の平和”をしみじみと感じた。エボラ出血熱で多くの犠牲者が出て、皆恐れおののいたが、最近薬が発明され、安心した様子。(⑤♀)

している。あるいは7-7のように、風景とともにそこにいた人物が思い出されることもある。7-8は特殊な例に属するが、原発事故を機に出身地の原風景がよみがえり、そこから社会への目が開けていくさまが読み取れる²⁴⁾。

IV. 学校

(1) 保育園・幼稚園

原風景を回答した高校生にとって、保育園・幼稚園に始まる保育・教育機関は、生活の多くの時間を過ごしてきた舞台である。本稿に関わる模擬授業の出席者は、そのほとんどが教育系(ないし保育・教育系)の講義の選択者であり、学校などについて比較的肯定的な思い出をいただく場合が多いと推察される。この点を念頭におきつつ、本章では保育・教育機関における原風景を、習いごとに関わるものと合わせて取り上げる。

最初に保育園・幼稚園について表8にまとめた。8-1は、保育園が社会に出て一人になる第一歩であることを、今の自分と関わらせながら示している。8-2・3は、自分が通っていた保育

園・幼稚園を、成長した高校生の立場から、一抹の寂しさとともにながめている。それでも、駐車場に変わった保育園跡地に残る桜の木の「大きな存在感」は、本人にとって原風景のよすがとなっている(8-2)。8-4・5は幼稚園での日常であり、とくに8-5は「小学校からは、おもちゃがある教室はないので」、幼稚園の教室を原風景として選んでいる。一方、8-6・7は非日常的な光景であり、8-6は筆者が模擬授業で教育のあり方を語る際に、よく引き合いに出す回答である。すなわち幼稚園児に「本当は公開しない絵巻物」の価値が十分に理解できなくとも、本物にふれさせること自体が長く記憶に残る体験となっているのである²⁵⁾。

幼稚園の教員にまつわる回答が8-8~10である。8-8では、給食時の思い出が、おそらくはそのとき感じたかすかな罪悪感とともに語られている。8-9・10は、いずれも先生が「とことん」「つきっきりで」付き合ってくれたことが、教員志望の原点となっており、とりわけ幼少期の教育において、時間をかけて子供と向き合うこと

表8 「原風景」の中の保育園・幼稚園

1.	私の「原風景」は夜の保育園である。共働きでいつも園内で最後に迎えが来たのだが、それまでにおやつを食べたり、ブロックで遊んだりしていた。誰もいない、昼間と少し違うために少しワクワクしたのを覚えている。今は、その保育園が少し変わったらしいがもう行っていない。ただ、一人で歩く夜の外は幼いときを思い出させ、さみしさと好奇心をよみがえらせてくれる。(⑥♀)
2.	私にとっての「原風景」は保育園です。うろ覚えではありますが、そこにはたくさんの楽しい思い出がありました。今はその土地は、駐車場になっています。昔のあたたかな記憶を感じさせない殺風景です。ただ、1つだけ残っているものがあります。私の保育園には大きな桜の木がありました。昔は毛虫が落ちてきて嫌でしたが、今となっては、その大きな存在感が昔も今も、変わらずにそこにあるということを嬉しく思います。(⑥♀)
3.	私にとっての原風景は、幼稚園のツリーハウスから見た幼稚園の校舎です。最近行って遊んだ時は全てが小さくて、色も変わってしまっていました。当時は大きな家に登っていたのに、今では一歩で上がれてしまって、大人になってしまったんだと実感しました。(⑮♀)
4.	幼稚園の中にあるすべりだいやブランコなどの遊具。走ってかけのぼったりする小さな山。とても広い原っぱ。(②♀)
5.	私にとっての原風景は、幼稚園のころの教室です。たくさんの遊ぶためのおもちゃや、初めて見る、遊ぶ友達の風景です。小学校からは、おもちゃがある教室はないので、この風景を選びました。(⑥♀)
6.	引越す前に通っていたお寺と併設されている幼稚園で、本当は公開しない絵巻物を見せてもらったこと。(⑥♀)
7.	幼稚園で初めてのお泊まり保育です。体育館がくらくてすごい不安だったけれど、たくさんの人が遊ぶのは良いなと思った瞬間でした。(④)
8.	幼稚園生の頃、給食ででたほうれん草のおひたしが食べれなくて、でも少しは食べないと先生に怒られるから、お友達と少しはしっこに寄せるって案を発見して、先生が食器を片づけている瞬間にそれをしたこと。お正月の親せきの集まりで、大人のひとたちに囲まれて、自分は父のひざの上に座っていて、大きいひげのおじさんから「おじさんの所においで！」と言われ、周りの大人のひとたちがすごく笑っていた風景。(⑮♀)
9.	私は幼稚園です。行きたくないと泣いていたとき、優しくとことんつきあってくれた先生方をおもいます。そして、この先生方がきっかけで、保育士や幼稚園の先生になりたいきっかけをつくってくれたところでもあるからです。(⑨♀)
10.	幼いころの幼稚園の先生がすごくいい方で、私が「先生」という職業にあこがれたきっかけです。特に、幼稚園の鉄棒でつきっきりで逆上がりの練習に付き合ってくれていたことは、今でも覚えています。(⑫♀)

の大切さを伝えている²⁶⁾。

(2) 小学校から高校まで

小学校の6年間は決して短くはない期間ではあるものの、小学校の教室内、ないし授業中の光景を原風景とする回答は少なかった²⁷⁾(表9)。9-1は授業内容ともつながる記述だが、むしろ自分の達成感や、それを支えてくれた友人・先生への感謝が主体となっている。また、小学校時代の好印象が教員を志すきっかけとなったり(9-2)、学校行事が思い出に残ったり(9-3)している回答もある²⁸⁾。他方、校庭が9-4~8のように取り上げられるのは、原風景が遊びによって形成されることをよく物語っている。そこで遊ぶ児童たちとともに校庭の思い出がえがかれ、今では「小学生だった頃とはまた違ったように見える風景にどこか寂しさを感じ」てもいる(9-7)。校庭が改変された際、記憶中にある在校時の校庭を原風景とする9-8のような例もある²⁹⁾。

原風景として通学路があげられることも多く(9-9~11)、とりわけ9-9のような「道草」

は子供にとって重要である³⁰⁾。小学校以来の通学路が「自分が歩いてきた今までを思い出すことのできる、特別な場所」となったり(9-10)、地域社会の中での通学路が語られたり(9-11)する例もある。9-12では在学中に小学校が統合された経験、9-13では小学校でいじめをうけた経験が、それぞれ強く記憶に刻み込まれている。

原風景とするには時間的に近すぎるせいか、中学校・高校でのできごとをあげる生徒はそれほど多くはない(表10)。その中で10-1は、中学校での教師との出会いが、「教師を目指そうと決めました」という進路選択のきっかけになっている。学校行事(10-2)のほか、中学校では部活動も一つの居場所として機能しており(10-3~6)、水溜まりができたテニスコートの整備(10-3)や、「辛い練習や複雑な人間関係を乗り越え」(10-4)たといった苦労をしたことが原風景としての定着に寄与している。10-6・7は今の高校との対比で中学校を懐かしんでおり、10-8は高校1年時の教室を思い出して、「私の中で記憶が薄れていくほど、それに対する懐かしきも

表9 「原風景」の中の小学校

1.	小学2年生の時にさか上がりができるようになったこと!!。友達や担任の先生に助けてもらって、できるようになったらクラスのみんなに「おめでとう」って言ってもらえたり、先生と一緒に喜んでくれたことがとってもうれしかったです♡。(12♀)
2.	私にとっての原風景は「小学校」です。小学校を見ると大好きだった先生や楽しかったことを思い出されます。そしてその場所は私が小学校の先生になりたいと思ったきっかけです。(9♀)
3.	幼稚園のお泊まりクリスマス会。小1の図工での賞状。小6の運動会「組体操」のタワーやピラミッドの成行き。(9♀)
4.	小学校の放課後、開放(校庭)で、いろんな学年の人たちとサッカーをして遊んだ。友達のお兄ちゃん等に混ぜてもらって、違う学年の友達が増えていった。(19♂)
5.	小学校の校庭。ブランコ、砂場、すべり台、鉄ぼう、いろいろな色のタイヤ、大きな校舎、緑のネット、シーソー、ジャングルジム、うんていがある。上級生が校庭でドッジボールしてて、下級生が鉄ぼうでさかあがりの練習をしている。(6♀)
6.	私にとっての原風景は小学生頃に見たトンネルからの風景です。私は校庭にあったトンネルに毎日友達と一緒に行って遊んでいました。そこからの景色は皆が校庭で遊んでいる様子、木々が生い茂っている様子、キラキラの太陽が照りつけている様子でした。あの時の私にはその風景がとてもキラキラして見え、今でも鮮明に思い出せます。トンネルからの風景は平和な世界が広がっていて安心できる絵でした。(6♀)
7.	私が思い浮かべる風景は、小学生の頃良く遊んでいた小学校の校庭の風景である。私は今でも小学校の前を通ることがあるのだが、小学生だった頃とはまた違ったように見える風景にどこか寂しさを感じる。(15♂)
8.	自分にとっての原風景とは、小学校の校庭です。自分の母校は、様々な事件やケガがあって、いろいろな遊具が改良、撤去されてしまい、自分がいたときと大分変わってしまったので、自分の記憶にある当時の校庭が、自分の原風景です。(15♂)
9.	私にとっての原風景は小学校の下校中です。友達とおしゃべりをしながら、わいわい下校するのは楽しかったです。少し寄り道をしたり遊んだりした下校中が私にとっての原風景です。(9♀)
10.	小学校の頃から通学路として使ってきたグリーンロード。春は満開の桜のアーチ、夏は木漏れ日とそれをすくうように吹く風、秋は木の実の香り、冬は落ち葉のこすれる音とそれの湿っぽい匂い。時間が経っても変わらない景色。自分が歩いてきた今までの思い出すことのできる、特別な場所です。(11♀)
11.	私が考える原風景は小学生の時に通っていた通学路です。住宅街でありながら、緑があり、大人達の子供を送り出す声や笑顔が見え、私の記憶の中で輝いていたイメージがあります。(7♀)
12.	私が懐かしと思う風景は、小学1～3年生まで通った学校からの風景です。というのは、私が小4の時に近くの学校合わせて3校が統合しました。だから入学した学校から卒業することができませんでした。今も時々、その学校の近くを通りますが、統合が決まったときの驚きと、不安をもっていたこと、新しい学校でたくさんの友達と生活できることへの楽しみなど、複雑な思いがよみがえってきて懐かしと思います。学校の統合というなかなかできない経験をしたときのこの思いは今後も忘れることはないと思います。(10♀)
13.	私にとって最も強く印象に残っている記憶とえば、小学校時代に受けたいじめの記憶です。毎日学校へ行くのが嫌で、泣きながら過ごしていたことを覚えています。それでも、今、思い返せば、それで得られたことも多く、私は苦しみと優しさ、人との接し方など多くを学ぶことができたと思います。良くも悪くも、今の自分を形作った多くはこの記憶であり、原点であると思います。(19♂)

表10 「原風景」の中の中学校・高校

1.	自分は、中学生のときに先生を見て、さまざまな事を生徒に分かりやすく教えているところを見て、自分も将来あんな風に生徒と接したいなあ、と思い、教師を目指そうと決めました。(8)
2.	中学校の体育祭の風景。リレーでクラス全員が熱くなっていたことが印象に残っています。(16♂)
3.	中学校にある大雨の次の日の水溜まりができたテニスコートが僕の原風景です。コートを使えるように、みんなで整備を裸足になってやっているのが強く印象に残っています。(15♂)
4.	中学3年生の部活の引退試合の日です。少しずつ部員が減り、最後に残った3年生8人全員が試合に出ることができました。負けてしまいましたが、誰も最後まで諦める事なく応援、プレーをしている時、部活を辞めなくて良かった、このメンバーで戦えて良かったと思えました。辛い練習や複雑な人間関係を乗り越えて、迎える事のできたあの日は、今、辛い事があった時にも心の支えになっている私にとって特別な日です。(11♀)
5.	F劇場の舞台です。ここは私の中学・高校の夏のコンクールの会場で、嬉しい結果、悔しい結果の2つを受けました。また、定演の場所でもあるので、今後一生忘れることはないと思います。(11♀)
6.	私にとっての原風景は、中学時所属していた美術部の活動場である美術室です。まだ遠い日ではないですが、放課後に行う美術部の絵の具を準備する姿、そして窓からは大きくすの木が見えて、油のにおいがかすかにしていたことを、今でも同じ美術部に所属している私は、今の部室で描いていても、ふと中学の部室、美術室を思い出します。(8♀)
7.	教室から中庭をながめるとき、ものたりなさを感じる。3年間過ごした中学の中庭のほう緑が多く、花がたくさんあったから。すべり台をおさななじみとすべっている風景。(6♂)
8.	私にとっての原風景とは、昨年を過ごした旧1-2の教室での授業中の風景だ。昨年見た景色は、原風景として最近すぎるかもしれないが、これが私には自然と懐かしいと感じられる。遠く過ぎ去ってしまった幼児の頃に見た風景に、懐かしさを覚えるほどの記憶はない。きっとこれからの私にとっての原風景は、どんどん新しいものになっていくと思う。私の中で記憶が薄れていくほど、それに対する懐かしさも比例して薄れていってしまうような気がする。自分にとっての原風景は、これから変化し続けるだろう。(6♀)

比例して薄れていってしまうような気がする」というとらえ方をしている。

(3) 習いごと

現代日本における子供の活動にみられる一特徴は、習いごとや塾など、学校や家・地域とはまた違った一つの間を有している点である(表11)³¹⁾。

11-1~3は、習いごと自体を取り上げた事例である。そこには、11-1のような「新鮮」な段階も、11-2のように「辛いことのほうが多く、何度もやめたく」なる段階もあるが、「経験、学んだ事は、今でも私の誇りです」(11-3)と、学校での部活動と同様に、習いごとが本人にとっての重要なよりどころをなすこともある。そのかわり、11-4・5のような習いごとの行き帰りの何気ない光景が原風景としてえがかれることもあり、通学路とともに、子供にとっての「道」の意味を示唆している。

V. 非日常・非風景

(1) お出かけ

前章までにみてきた回答と異なり、本章で取り上げるのは非日常ないし非実在の原風景である。ここには厳密に言えば原風景といえないものも含まれるが、以下のような光景がそれぞれの高校生の心に強い印象を残していることは事実である。

表12のうち、高い場所から見下ろした経験(12-1・2)や、遊園地での体験(12-3・4)は、

非日常的な感覚とともに、一種の恐怖感も記憶を促しているとみられる。12-5のような迷子の例も同様である。家族旅行をえがいた12-6・7は、嗅覚や味覚とともにその原風景が想起されている。

居住地が都市部である場合、旅先での自然とのふれあいが代替的機能を果たすことが少なくない(12-8~14)。その中には、「心が安らぎを求めているとき」に幼少期によく訪れていた山中の寺院を思い浮かべたり(12-8)、成長とともに毎年見る初日の出が「少しだが違った形で見え」たり(12-10)と、自然と自己とを関わらせながらとらえている回答もある。さらにはハワイ(12-13)やオーストラリア(12-14)など、海外旅行での風景があげられる場合も存在し、日本の高校生が思いえがく原風景の舞台が国内に限られないという現代の一側面を示している。

(2) 非風景

少数ではあるが、原風景として、狭義の「風景」ではないものをあげる記述も見受けられる(表13)。それらは、テレビ番組(13-1)・歌(13-2)・本(13-3)などである。そして可視的な風景でなくとも、例えば音楽によって、「昔の楽しかったこと、好きだったこと、悲しかったこと、嫌いだったことが鮮明に思い出され」ること(13-2)は大いにあり得よう。また13-4のように、夢で見ることが多い風景が、「心に強い

表11 「原風景」の中の習いごと

1.	私の「原風景」は近所にあるグラウンドです。私は小学校1年生からサッカーを習っていました。保育園の頃は何も習っていなかった私にとって習い事というのはとても新鮮でした。歩いてグラウンドに向かっている時に聞こえてきた無邪気な声、無我夢中でサッカーをする大好きな仲間。今はもう皆バラバラになってしまったけど、今でもふとした瞬間に思い出す私の「原風景」です。(6♀)
2.	小学校。おばあちゃん家。水泳の練習場所。小3から選手コースに入り、本格的に始めた水泳は、辛いことのほうが多く、何度もやめたくなくなりました。でも、辛かった分、試合の結果が良かった時の喜びは忘れられません。毎日ある厳しい練習をしていた場所が私にとっての原風景です。(9♀)
3.	私にとっての原風景は、4歳から11歳まで続いていたバレエ教室です。そこで私は7年間たくさんのことを学び、日々練習してきました。一度、主役という大役を任されたこともありましたが、滅多にやらせてもらえない主役をやった経験、学んだ事は、今でも私の誇りです。(2♀)
4.	私にとっての「原風景」は、小学校五年生の時のみんなで一緒に学校からそろばん塾に行っていた時。いろんな生物を見つけたり、どうでもいいことを話したり、当たり前の日常が楽しかった時だ。(6♂)
5.	私にとっての原風景は「小さいころ習っていた書道教室の帰り道」です。小さいころはあたりまえのように通っていた道ですが、今となってはたまに通るその道は昔を懐かしく思いだすところです。(9♀)

表12 「原風景」の中のお出かけ

1.	小学校3年生の時、みなとみらい地区見学の時にランドマークタワーに登って展望台デッキに登った時に見た景色がとても印象的でした。(18♂)
2.	私にとっての原風景は、小さい頃に父親と乗った飛行機からの風景です。私にとって、初めての体験でした。父は私を窓側に座らせ、景色を見せてくれました。初めて見る空の上からの風景は、当時の私に、まるで別の世界にいるように感じさせてくれました。(15♀)
3.	小さい頃に身長制限に通ってしまい、ビッグサンダーマウンテンに乗れてしまった。ものすごいスピードで高い景色を見て、今、ジェットコースターや高い所が苦手である。(4)
4.	4さいくらいのとき、家族でディズニーに行って、ディズニーのホテルに泊まったこと。ミッキーに会うとき着ぐるみが怖くて大泣きしました。(13♀)
5.	自分が幼稚園に通っていた時、たまたま迷子になってしまったが、その時一緒にいてくださったお兄さんがいた。大人の方だったが、とても優しくしてくれて、不安も少しずつ消えた。こんな大人になりたいと思ったばかりの原風景である。(4)
6.	私は幼い頃から毎年、冬になると家族で草津温泉に行っていた。独特な硫黄の匂い、どこか懐かしい街並み、寒い中での食べ歩き、そして大好きな家族との会話。家族での草津温泉旅行という私の原風景は大切に温かい。(4♀)
7.	初めてカニを食べた体験。おそらく、家族で水族館にいったときの話。海の生物を見て楽しんだ後、水族館に付属しているホテルにいった。その日の夜ご飯はバイキングで、カニも食べ放題だったので、初めてカニをたくさん食べた。(4)
8.	私にとっての原風景は、山の中の風景です。大きな木に囲まれ、近くに川が流れている大自然の風景です。幼い頃によく訪れていたお寺が山の中にあり、そこを訪れるといつも心が穏やかになり、とても心地がよかったのを覚えています。今でもふとそのイメージが脳裏に浮かびます。きっとそれは心が安らぎを求めているときだと考えています。(11♀)
9.	私にとっての原風景は、いちご狩りの時に見た、海の景色です。よくいちご狩りで海の景色を見ます。海を見ると今でもその時の記憶がよみがえります。(7)
10.	自分にとっての原風景は、毎年見る初日の出である。生まれて初めて見た初日の出は、幼いながらに声が出ないほど感動した。それから年を重ねるごとに初日の出を見てきたが、毎年毎年、少しだが違った形に見える。もちろん日の美しさには変わりはないはずなのだが、一緒に見る人や前後の出来事、自分の精神年齢の向上などによって、微妙に見え方が変化するのだろうと思う。自分にとってそうだったように、原風景とは、見る環境によって様々な姿をみせるものなのだと感じる。(11♂)
11.	私が家族全員で代々木公園に行ったときに、落ち葉のプールで遊んでいて、気がついたら落ち葉の中に埋もれていた。不思議な体験ではありました。(2♀)
12.	長野の山奥で見た満天の星空。車の天窓から顔を出して大はしゃぎしたこと。顔にあたる強い風の痛みと、自然の匂い。野生の鹿の群れにあった。(5♀)
13.	2才のときに行ったハワイの海。すばらしさに感動して、幼いながらもきおくに残っています。(8♀)
14.	グリーン島でシュノーケリングをやったたくさんのきれいな魚を見たことです。とても深くて怖かったです。(2♀)

表13 「原風景」の中の非風景

1.	懐かしさを感じるものといえば、ウルトラセブン。僕の正義感の幹となったこの作品は、名前を聞くだけでも幼少期を思い出す。ただ単に怪獣と戦っているのではなく、少年たちを助ける地球防衛軍の人たちも、悲しい立場に置かれた怪獣も印象に残っている。この作品は僕にとって正義であり、自分を形成した懐かしいものである。(3)
2.	GReeeeNの「キセキ」、Aqua Timezの「決意の朝に」。この2つの曲を聞くと、昔の楽しかったこと、好きだったこと、悲しかったこと、嫌いだったことが鮮明に思い出されます。この2つの曲は決して原風景ではありませんが、思い出や記憶、懐かしさを伴って思い浮かべさせられたので同じかな？と思い、これにしました。(3)
3.	私にとっての原風景は、小学生のときに読んだ本の脳内イメージです。特にその中でも「三国志」と「偉大なワンダール最後の一匹」という本は、今でもふと思い出します。この本に出会えたことが、私を本好きにさせた一つの要因です。(19♂)
4.	実在する風景ではないが、夢で見ることが多い「雨が降っていて辺りが暗い」風景が心に残る。その中の自分は傘を持っておらず、辺りの人々は傘を持っている。その人々は傘を持ってなく立ちつくしている自分に声をかけずに横を通り過ぎていき、ついに辺りに人々がいなくなって自分一人になってしまう、といったような夢を昔から見ているので、心に強い印象を残している。(3)
5.	原風景というのが、まずよく分からなかったのが、調べてみたらなつかしいと思うような場所、実際にある場所でなくとも、自分の中にある想像した場所というのがありました。自分にとっての原風景は、今の環境とはまったく反対の、自然だけで、人工物が何もないありのままの風景です。(17♂)

印象」を残す例もある。13-1～4がいずれも東京都心部に位置する私立高校での回答であることは、いささか暗示的である。

このほか、13-5のように、原風景の「なつかしいと思うような場所」という意味をふまえた上

で、「今の環境とはまったく反対の、自然だけで、人工物が何もないありのままの風景」を自分にとっての原風景とする記述もみられた。現在の自分の環境にはない風景を懐かしいとするのは矛盾のようでもあるが、大きな意味での人間にとって

の原風景は、やはり自然に帰着するとともにえられよう。

VI. 結びにかえて

高校での模擬授業において、筆者は、以上のような原風景を例示した上で、最後に図2を用いて、進路選択へのささやかな助言を行なっている。これはほとんどの場合、高校の進路指導の一環として模擬授業の機会が設定されていることをふまえている。

一般に「進路指導」というと、図2のⅠのように近未来の進路から将来の職業につなげたり、同じくⅡのように職業をみすえた進路を選んだりするよう求められることが多いようである。こうした形で進路を決められる場合、それに異論はない。しかし、それだけでは決め手に欠けるという場合、本稿で述べたような過去の原風景をいったん参照し、それを鏡として自らの進路につなげていく思考法もあってよいと考える（図2のⅢ）。むしろ、原風景がそのまま進路になるというのではないが、過去の自分との対話が、現在や将来の自分に対する何らかの示唆となることは十分にあり得よう³²⁾。

これはまた、高校生が将来職業に就いた際に、高校生である今の自分が原風景の一つとなっていくことも意味する。そのためには、高校生が過度に進路選択に追われることなく、まずは今の自分の生活を充実して過ごすことが欠かせない。長期的に言えば、そのことは例えば現代日本の社会人

にとっての大きな問題の一つであるライフワークバランスの適正化にも寄与するであろう³³⁾。

精神科医の中井久夫は、人間の記憶について、まず「短期記憶」と「長期記憶」に二分し、さらに長期記憶を「一般記憶」と「エピソード記憶」に分類している。その上で、試験などで問われる一般記憶がいかに豊富であっても、それはいわば歩く百科事典にすぎず、個々人に固有であるエピソード記憶が豊かでなければ、生きた人間とはいがたいと述べている³⁴⁾。エピソード記憶につながる原風景の蓄積こそが人格の芯をなすとなれば、教育においても決してそれを軽視してはならないだろう。

「よく学び、よく遊べ」に対応する英語の表現は、All work and no play makes Jack a dull boy. (= 勉強ばかりさせて遊ばせないと、ジャックを愚鈍な少年にする) であるという³⁵⁾。高校生の原風景を扱った本稿の結びにかえて、この言葉をおきたい。

付記

筆者の模擬授業に出席してさまざまな形の原風景を書いてくれた各校の高校生、模擬授業にご協力を賜った各校の先生方、および資料の印刷・発送等でお世話になっている文教大学入学センター事務室の職員の方々に謝意を表したい。

注

- 1) 新村出編 (2008): 『広辞苑 第6版』, 岩波書店, p.908・912.
- 2) カロッサ著, 斎藤栄治訳 (1953): 『幼年時代』, 岩波文庫. なお, 堀辰雄『幼年時代』や, 福永武彦『幼年』は, カロッサの同作品に影響をうけて執筆された. 堀辰雄 (1955): 『幼年時代・晩夏』, 新潮文庫, pp.7-66 (執筆の動機については, その『花を持てる女』(同上書, pp.101-102) 中に言及がある). 福永武彦 (1985): 『幼年』, 河出文庫, pp.7-76.
- 3) エーリヒ = ケストナー著, 高橋健二訳

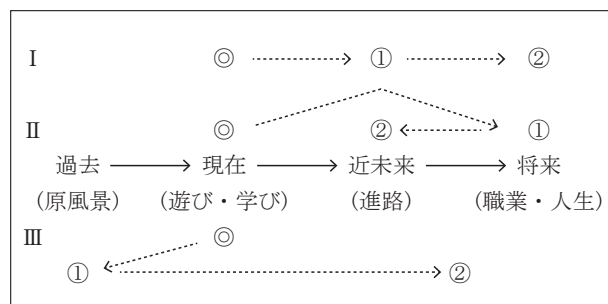


図2 高校生の進路についての考え方と原風景

(筆者作成)

- (1962)：『ケストナー少年文学全集 7 わたしが子どもだったころ』，岩波書店，p.18も，人間には客観的な暦の時間と，主観的な思い出に関わる時間の「二とおりの時間」があるとし，「忘れてしまったことは古く，忘れないことはきのうあったことだ。ものさしは時計ではなくて，価値である。そして，いちばん価値のあるのは，楽しいにせよ，悲しいにせよ，幼年時代である」と述べている。
- 4) 田口義弘訳 (1996)：『ハンス・カロッサ全集 2』，臨川書店，pp.273-277.
- 5) 管見にふれた作品だけでも，前掲 2)・3) や後の注にあげるもののほか，下記の通り列挙できる。トルストイ著，藤沼貴訳 (1968)：『幼年時代』，岩波文庫，208p. ヘッベル著，大畑末吉訳 (1942)：『わが幼年時代』，岩波文庫，104p. ゴーリキイ著，湯浅芳子訳 (1934)：『幼年時代』，岩波文庫，406p. 室生犀星 (1952)：「幼年時代」，同上『或る少女の死まで 他二篇』，岩波文庫，pp.5-79. 中野重治 (1985)：『梨の花』，岩波文庫，479p. 石井桃子 (2002)：『幼ものがたり』，福音館文庫，333p. また，アンソロジーとして，内田百閒 (1991)：『幼年時代』，福武文庫，315p. および，池内紀ほか編 (1988)：『ちくま文学の森 3 幼かりし日々』，筑摩書房，468p. などがある。なお，こうした文学作品にみられる原風景を地理学的に分析した研究として，以下のものがある。寺本潔 (1985)：「自叙伝からみた大岡昇平の地理的原風景」，地理学報告62，pp.57-64. 同上 (1992)：「童話作家，新美南吉の地理的原風景—作品「家」を中心に—」，地理学報告76，pp.7-17. 土田良一 (1990)：「「良平」の世界像—地理教育との関連—」，鹿児島短期大学研究紀要45，pp.29-52.
- 6) 安藤忠雄 (2008)：『建築家 安藤忠雄』，新潮社，pp.280-293 (朝日新聞2017年3月19日付「折々のことば」で引用)。著者は同書中の一章を「子供のための建築」にあて，そこでは「すべてを設計し尽くすのではなく，あえて目的のない，ほったらかしの場所をつくる」ことを追求しているという。また，建築の分野で原風景を取り上げたものとして，仙田満 (1982)：「原風景によるあそび空間の特性に関する研究—大人の記憶しているあそび空間の調査研究—」，日本建築学会論文報告集322，pp.108-117や，藤島亥治郎 (1987)：『住まい学大系 1 明治少年記—建築家の思い出ばなし—』，住まいの図書館出版局，221p. 仙田満編 (1990)：『住まい学大系32・33 こどもと住まい 上・下一五〇人の建築家の原風景—』，住まいの図書館出版局があげられる。
- 7) 河合隼雄 (2001)：『Q&Aこころの子育て—誕生から思春期までの48章—』，朝日文庫，p.76 (朝日新聞2017年5月5日付「折々のことば」で引用)。この引用を行なった鷺田清一は，「これに「先生の目がとどかないところで」もつけ加えたい」と続けている。
- 8) 西川正 (2017)：『あそびの生まれる場所—「お客様」時代の公共マネジメント—』，ころから，299p. は，その大きな原因を現代日本社会の「制度化」(お役所化)と「サービス産業化」(住民のお客様化)に求めている。また，仙田満 (1992)：『子どもとあそび—環境建築家の眼—』，岩波新書，pp.148-175は，子供の遊び環境に必須な要素として，遊び時間・遊び空間・遊び集団・遊び方法の4つをあげる。
- 9) <https://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/kosodate/kaigi/documents/kodomonoasobibanikansurukihonjourei.pdf> (閲覧日2017年9月1日) (朝日新聞2014年10月16日付「天声人語」で引用)。
- 10) 高校での模擬授業時には，当該高校周辺の現在と明治期の地形図を配布し，高校生たちに地域の変容を実感してもらうようにしている。また，寺本潔・大西宏治 (2004)：『子どもの初航海—遊び空間と探検行動の地理学—』，古今書院，pp.131-154は，岐阜県羽島市を事例に，子

- 供の遊び空間の世代間変化を論じている。
- 11) 奥野健男 (1972):『文学における原風景—原っぱ・洞窟の幻想—』, 新潮社, 223p.
- 12) 前掲11), p.55. これに関連して, ①大岡昇平 (1990):『幼年』, 講談社文芸文庫, p.80も, 「人間の郷里感覚は, 外界が少し明瞭な形を取りはじめる六, 七歳の頃に, その根底が作られるような気がする」と述べている。また, ②井上靖 (1976):『幼き日のこと・青春放浪』, 新潮文庫, p.71は, 「子供というものは, 大人たちの想像もできない鋭い触覚を振り廻している。自分の幼時を振り返ってみると, それがよく判る。子供がその鋭い感覚を持ったまま成長して行ったら凄いことになるが, よくしたもので, 神さまは適当な時期に子供からその素晴らしい武器を取り上げてしまう」と記している。
- 13) 地理学における既往の研究では, 大学生の原風景を扱ったものがいくつかみられる。①寺本潔 (1986):「大学生の回顧文に見る地理的原風景の構造」, 地理学報告62, pp.36-43。②大内俊二 (1989):「中大生に見る日本人の「原風景」」, 中央評論41-1, pp.65-69。③白石太良・土田良一 (1993):『人文地理—風景・空間・知覚—』, 建帛社, pp.24-30。④熊谷圭知 (1997):「お茶大生の原風景」, お茶の水地理38, pp.35-51。また他分野でも, 高校生や短大生・大学生の原風景にもとづき, 以下のような諸研究が行なわれている。⑤岩田慶治 (1977):「日本文化の深層—全体像のためのフォークロア—」, 諸君9-11, pp.140-162。⑥同上 (1985):「原風景の構図」, 同上編『子ども文化の原像—文化人類学的視点から—』, 日本放送出版協会, pp.23-36。⑦関根康正 (1982):「原風景試論—原風景と生活空間の創造に関する一考察—」, 季刊人類学13-1, pp.164-191。⑧星野命・長谷川浩一 (1985):「青年の「心の風土」としての原風景」, 九学会連合日本の風土調査委員会編『日本の風土』, 弘文堂, pp.119-154。⑨野中健一 (1992):「大学生の原風景にみる生活環境の中の自然」, 環境教育3-1, pp.2-18。⑩寺本陽子・山本真由美 (2005):「高校生における「こころの中の風景」が心理臨床の場で果たす役割—原風景と心象風景—」, 徳島大学総合科学部人間科学研究13, pp.35-53。⑪上塘禎・井倉洋二 (2010):「個人の持つ原風景の形成プロセスと環境教育活動が及ぼす影響」, 鹿児島大学農学部演習林研究報告37, pp.21-28。なお, 地理学の立場から既往の原風景研究をレビューした寺本潔 (1994):「子どもの知覚環境研究の展望—メンタル・マップと地理的原風景—」, 愛知教育大学研究報告 (人文科学編) 43, pp.75-88では, 以下の2人の民俗学者の自叙伝にふれられている。柳田國男 (2016):『故郷七十年』, 講談社学術文庫, 509p。宮本常一 (1993):『民俗学の旅』, 講談社学術文庫, 247p。さらに, 歴史学者が自身の原風景を回想した著作に, 古島敏雄 (1997):『子供たちの大正時代—田舎町の生活誌—』, 平凡社ライブラリー, 405p。がある。
- 14) ただし, 高校側から質問があった場合には, 簡単な説明を行なった。また, 高校側が原風景を定義した上で, 生徒が記入した場合もあった。
- 15) 前掲13) ⑦に対し, 岩田慶治は, アンケートや作文の事例にもとづく原風景の叙述を評価し, 「希望は, この部分の事例をもっと十分に, 原文のままとはいかないまでも, もっと長く, 引用できないかということである」と述べている。岩田慶治 (1982):「コメント1」, 季刊人類学13-1, pp.191-193。
- 16) その好例として, 工藤直子 (2006):『象のプランコーとうちゃん—and—』, 集英社文庫, 297p。があげられる。
- 17) 前掲13) ⑧, pp.143-144は, 東京とその近郊の短大生に「「故郷」をよその土地にもとめる者」が少なからずいたことを指摘している。
- 18) S. T. アクサーコフ著, 貝沼一郎訳 (1993):『幼年時代—孫バグローフの幼年時代—』, 人力社, 500p。は, 祖父母の死も含め, 両親や親

- 戚などが関わる原風景をすぐれた描写で叙述している。
- 19) 自然環境の中で育まれた自身の原風景を作品化した例として、①ハドソン著、寿岳しづ訳(1937):『はるかな国 とおい昔』, 岩波文庫, 442p. はアルゼンチンのパンパ, ②河合雅雄(2002):『少年動物誌』, 福音館文庫, 317p. は兵庫県篠山町(現, 篠山市)を舞台としている。
- 20) 前掲13) ④, p.39は, 原風景に自然的風景が多いという事実が, 「現代の環境整備のあり方に対するひとつの異議申し立て, あるいは「指針」の役割を果たし得るのではないだろうか」と問題提起している。また, 前掲13) ①, p.37も, 「子どもにとっての自然物の重要性は, おそらく大人のそれと全く別のレベルで論じられるべきものかもしれない」としている。さらに, C. W. ニコル著, 鈴木晶訳(2002):『小さな反逆者』, 福音館文庫, 315p. や, 前掲19) ②は, それぞれのあとがきの中で, 自身が育った環境と比べつつ, 現代日本の大人たち(あるいは文明)が子供たちから自然を取り上げてしまったと指摘している。「自然の破壊が大規模に起こっているだけではなく, 私たちの心の中の自然を破壊するようなことがらが, 身のまわりをがんじがらめにとりまいていることに, 十分注意してほしいといいたいです。そして, 文明が進めば進むほど, 一方では, 人間の心が荒らされていく危険が大きくなっていくことに, 警戒しなければなりません」(前掲19) ②, pp.312-313)。
- 21) 前掲13) ②, p.69は, 都市部出身者であっても都市的な原風景をあげる回答は意外に少なく, 「大人たちが管理する空間は, 子供たちにとっては良い遊び場にはならないようである」と述べている。
- 22) V章2節にもあらわれるが, 原風景が視覚にとどまらず, 嗅覚・聴覚・触覚・味覚とともに感得される場合があることは, 前掲13) ④, pp.42-43でも指摘されている。
- 23) 逆に, 日本人の異郷における原風景の例として, 前掲16) は台湾を, 神沢利子(2003):『流れのほとり』, 福音館文庫, 474p. は樺太(サハリン)を舞台としている。また, イ=サンクム(2007):『半分のふるさと—私が日本にいたときのこと—』, 福音館文庫, 452p. は, 第二次大戦前・戦中における在日朝鮮人の原風景をえがき出している。
- 24) ジュール=ヴァレス著, 朝比奈弘治訳(2012):『子ども 上・下』, 岩波文庫は, 厳格な両親に育てられた主人公が, やがて社会への目を見開いていくさまをとらえた自伝的小説である。他方, リチャード=ライト著, 野崎孝訳(2009):『ブラック・ボーイ 上・下—ある幼少期の記録—』, 岩波文庫は, 黒人としてアメリカ合衆国南部に生まれた著者が, 成長とともに黒人差別への反抗心を育んでいくさまを克明にえがいている。
- 25) 筆者はフランスでの在外研修中(2016年度), 各地の美術館で, 学校の課外活動として子供たちが作品の模写などに取り組んでいる姿をたびたび見かけた。近年の日本で削減されがちな学校外での活動が子供に与える影響の大きさについて, 考えさせられる光景であった。これに関連して, 谷崎潤一郎(1998):『幼少時代』, 岩波文庫, pp.209-210には, 「演劇に限らず, 音楽でも絵画でも, 出来れば少年の時になるべく第一級品の芸術を見せてもらっておくことである。(中略) たとい少年の理解を超えているようなものでも, それが一流のものであれば, 何らかの形で心の奥に跡をとどめ, 他日必ずその感銘が蘇^{よみがえ}生って来ないはずはない」とある。
- 26) 小学校の例であるが, 児童と真摯に向き合う教員との幸せな出会いの原風景をえがいた作品として, 西川司(2015):『向日葵のかっちゃん』, 講談社文庫, 264p. があげられる。
- 27) ルナン著, 杉捷夫訳(1953):『思い出 上・下』, 岩波文庫が, 学校での教育内容に関わる

- 回想に多くのページを割いているのは、著者の精神的遍歴をえがくことが同書の主眼になっているためと思われる。
- 28) 前掲11), p.76で、奥野は個人的に「少年期の殆んどを過ごしたはずの学校や校庭は、決してなつかしい思い出としては浮かんで来ない」と述懐する。前掲13) ④, p.40・44は、これを引用しながら回答の中に学校や教師があまり言及されていないと説明する。他方、本稿の例で少数ながらそうした学校や教師にふれた回答がみられるのは、教育系を志望しているという受講生徒の志向とも関連するものであろう。これと関連して、前掲13) ⑧は、全国の短大生の原風景を調査する中で保育科・幼児教育科や児童教育科の学生を選んだ理由の一つに、こうした学生が「恐らく自身の幼少期の体験について明快な記憶と積極的な意味づけをしてくれるであろうとの期待を抱いたこと」(p.122)をあげており、教師との関わりを示す原風景の回答もいくつか例示されている(pp.129-130)。
- 29) 現在の東京都渋谷区域の小学校に通い、その校地が跡形もなくなっている大岡昇平は、思い出のよすががない自分を「やはり故郷を持たない人間かも知れない」とし、「多くの町や村の小学校には、昔と同じ木が立っているだろう。地方生れの人はやはり倖せである」と記している。前掲12) ①, pp.86-87。
- 30) 前掲10), pp.11-16は、「通学路で出会う自然や社会的な事象こそ、いろいろな場所の認識の始まりであり、大人になっても思い出すことのできる原風景のひとつになる」と述べ、その例として、さくらももこ『ちびまる子ちゃん』の遊び空間として、自宅の次に道が頻出することを紹介している。水月昭道ほか(2003):「下校時の帰宅路に見られる子どもの道草行為とみち環境との関係」、住田正樹・南博文編『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』、九州大学出版会, pp.345-379も、「道草」に注目している。
- 31) 前掲10), pp.147-153は、現代の子供の遊び空間・時間がプログラム化される一方で、習いごとや塾を通じて自分の居住地から離れて住む子供たちと友人関係をもてるようになったと指摘している。
- 32) 本稿冒頭で引用したカロッサの文章にも、過去を参照して現在や将来につなげる態度が述べられている。また、前掲13) ⑩, p.49・51は、高校生は原風景形成の途上にありながらも、「原風景は、自分の能力や価値観に疑問を抱いたりしたときに立ち帰る心のよりどころとなっている」とまとめている。
- 33) 一例として、幼少期や青年期における習いごとや部活での活動を大人になってからも続ける場合が想定される。
- 34) 中井久夫(2009):『精神科医がものを書くとき』、ちくま学芸文庫, pp.257-258(朝日新聞2015年6月11日付「天声人語」で引用)。同書によれば、老人性認知症の治療の際にはエピソード記憶を重視することが重要であるという。
- 35) 前掲19) ①, p.300に、一時著者の家庭教師を務めた神父の台詞として引用されている。そもそも、安藤美紀夫(1977):『児童文学の散歩道』、玉川選書, p.28が指摘するように、「子どもの日常的生活パターンの中で、本来分離すべきはずのない、遊びと学習が、一般的には対立するものとして捉えられている今日」の状況こそ、問われるべきともいえよう。